アンドロイドは陶酔の夢を見る

後編

～体験版～

様々なかたちのホースやコード、生き物を思わせる粘質で柔らかい触手が山となって、それらがビチビチと動いているのだ。

（なんだこれ、なんだこれ！）

困惑する２Ｂだったが、身体をぎっちりと拘束されて一瞬息が詰まる。しかし次の瞬間には緩められ、２Ｂは抵抗する気力を失った。

両膝に触手が絡み、腰にも巻き付いてくる。

２Ｂは宙で赤子の小水のような屈辱的な格好にされ、秘部をすべてさらされる恥ずべき恰好にさせられた。

（くっ、こいつらも、もしかして私の身体を乱す気か・・・！）

そう理解した瞬間、体中の淫熱が一気に湧きあがり、これまで自慰で不足していた全身の性感帯が一気にざわめき始める。

無数の触手に絡まれ、これからどんな責めを受け、どれだけの快楽を受けるのだろうかと考えると、それだけで２Ｂの股間は濡れ始めていた。

「あああうっ！」

べろん、と人間の舌に似た質感の触手が、股間を舐め上げた。

「あっ！あっ！あっ！あぁぁっ！やめ、あぁぁあっ！」

２Ｂの反応に気をよくしたのか、舌触手は何度もぺろぺろと股間を舐め上げる。触れられるたびに２Ｂの身体が空中でびくびくと跳ね上がり、快感がどんどん高まってゆく。
少しずつ舐める動きが早まり、どんどん絶頂への快楽が昇り、２Ｂは先ほどの驚愕も忘れて快楽に浸り始めた。

「あぁぁぁっ！あああっ！ああっ！あぁぁっ！あっ！うあっぁああっ！」

舌先で残像が付くほどぐりぐりと股間を撫で穿られ、上がる快感が止まらない。

（キモチイイ、気持ちいい、きもちいい・・・！）
自分の指では考えらえない強烈な快感に、２Ｂはすぐに快楽の声をあげた。そして、舌先がクリトリスを激しく舐めた瞬間、２Ｂは簡単に絶頂してしまう。

「うあぁぁあああああっ！」

背中を反り返らせて絶頂を体現し、２Ｂの股間からは愛液が滴った。
獲物が悦んでいると学習したらしい触手たちは、一気に開かれた２Ｂの股間へと向かう。

「うぐっ・・・！うあぁぁっ！あああっ！あん、あぁぁあ、あうぅぅぅっ！」

十は超えるだろう様々な感触を持った触手が、一斉に２Ｂの股間を埋め尽くした。ざらざらした物やつるつるした物、粘液をまとったものや硬さのあるものが蠢き、２Ｂの股間をそれぞれの動きで探りまくる。

「あぁぁぁあっ！あぁぁぁっ！やめ、やめろ、あっぁあぁあ！あっ！あぁぁぁあぁ！」

クリトリスも膣もアナルも、股間の一線はすべてしゃぶりつくされ、ビチビチと跳ねる触手たちに蹂躙される。

媚薬が最高潮に高まった今の２Ｂの身体で我慢できるものではなかった。

「んぐっ・・・！あぁ、あぁぁあああ――――――――――！」

複数の全箇所責めに、２Ｂは一気にイカされた。

（ああ、もっと・・・・）

自慰では決して得られないこの快感に、２Ｂは無意識にこれ以上の快感をねだってしまう。そして２Ｂの期待に応えるように、股間に群がった触手たちはビチビチとした動きを止めようとしなかった。

「うあああああっ！あっぁあっ！あぁぁあぁあっ！イク、イクううううう！」

空を仰いで２Ｂは達し、愛液を漏らすが、それらは触手に巻き込まれ、それぞれの摩擦で泡立ち、さらにヌルヌルになって２Ｂに強い快感を与え続けてくる。

クリトリスにヌルヌルの触手がとりつき、上から強く圧迫しながら激しい勢いでぐりぐりと捏ね回してくる。

「あぁぁあっぁぁっ！あぐっ！あぐっ！あおぉおおおおっ！」
自分の指の動きとは比べ物にならない激悦に、２Ｂは大声で喘いだ。
そして差し出された上半身にも触手コードが群がってくる。まろやかな乳房に絡み、ぎゅうと締められた瞬間、２Ｂの中で悦びがあふれる。

（ああ、これ、これだ！これが欲しかったんだ！）

下半身と上半身の同時責めに、２Ｂは無意識に歓喜して受け入れてしまう。
次々と触手コードが２Ｂの身体に纏わりつき、体中のあちこちを柔らかく、強く、絞められてゆく。

「あっ！あっ！あっ！あぁぁっ！」
これまで責められてこなかった脇をべろべろと舐られ、ゾクウ、と快感が走る。その下の脇腹にも肉厚の舌触手が張り付き、敏感な性感帯や背中を所かまわず舐めまわし、２Ｂを快楽に陥れる。

「んぐうぅ、あっぁ、ああ、ああっ！あっ！あっぁあぁっ！」

ほとんど全裸にされていた２Ｂだったが、下半身のニーハイブーツと同じくニーハイの黒ストッキングだけは履いたままだった。それが初めて触手に巻き付かれて引き抜かれ、ニーハイストッキングも破られてしまう。

ほとんど全裸になった２Ｂだったが、今は羞恥を感じている余裕はなかった。解放された両の生足にも触手が巻き付き、そのヌルヌルとした体表で、足まで性感帯のパーツに替えられた２Ｂの美脚を撫でまわしまくる。

「ううっ・・・あぁぁぁっ！あっ！足がああ！ひあっ！感じ・・・んんんっ！」

足裏に細い触手コードが何本も絡み、指の間や踵を舐めたりして２Ｂを感じさせてゆく。触手は気持ちよい具合で２Ｂの足を締め付け、ふくらはぎや太ももにまで迫る。初めて感じる足の快感に戸惑いながら、２Ｂは快楽を我慢できず、つい甘い声を上げてしまう。

「あああん、あっぁあああぁっ！あああ、あぁぁああっ！足、裏、だめ、くすぐった・・・！」

レロレロと肉厚の舌触手で素早く舐め続けられ、くすぐったさ以外にも妖しい感覚が呼び覚まされ、２Ｂの両足は震えた。

しかし、最も感じるのは、やはり股間と乳房だ。乳房には何本もの大小のワーム触手が巻き付き、こね回し、柔らかいのを良いことに縦横無尽に弄り回している。

そして、乳首にこれまで感じたことがない激悦がはしり、２Ｂは一瞬で絶頂に持ち上げられて悲鳴にちかい嬌声を上げた。

「ひぁぁあああああああああああああ――――――――――――――――！」

これまで擦り責めや振動責め、舐め責めを受けてきた２Ｂだったが、吸い上げられるのは初めての体験だった。

小さな口を持った触手が２Ｂの乳首に張り付き、それを強く吸った瞬間、彼女の中で快感が一気に弾けた。

「ふぁぁぁぁあああああああああああああっ！」

初めて感じる吸引の快感に、２Ｂは身体をガクガクさせながら激しく絶頂した。そして、片方だけだった乳首の先にも口触手がとりつき、ほぼ同時に吸い上げられる。

「あっ！あああっ！あぁぁあぁぁぁぁあああああああああああああああああああ！」

乳首を吸われながらも乳房を、円を描くようにしてワーム触手にこね回され続けている。首も耳も舌触手で舐められ、上半身は快楽の坩堝となった。

「あっ！あっ！あっ！あっ！あっぁあああっ！やめ、あぁっぁぁっ！あああああっ！」

乳首を擦っていた口触手が、ちゅ、ちゅ、と吸い上げたりそのまま乳首を限界まで伸ばして離すという行為を繰り返す。そのたびに、２Ｂの脳裏に真っ白な絶頂快感が押し寄せ、胸でここまで気持ちよくなれるのかと驚愕しながらも妖艶に喘ぎ続けた。

「んおっ！おおっ！あぁぁぁあああああああああああぁぁぁっぁああ！」

今度はざらざらした触手が２Ｂの乳首に密着し、高速で上下に擦り始めた。峻烈な快感が胸から脳天を貫き、２Ｂは天を仰いで絶頂と等しい快感を、擦られている間ずっと感じさせられている。

（クる、だめ、これでイッてはダメ、あああ、でも、止められない、我慢できない・・・！）

自身の思考回路が警告を訴えるほどの快感が迫るが、触手に雁字搦めにされている２Ｂには何もできることはない。触手の動きはますます激しくなり、ジュジュジュジュ、と高速の音を立て始めた瞬間、２Ｂは電撃に似た衝撃とも言える快感を叩きつけられた。

「あぁぁあああぁあっぁぁぁぁぁぁぁっぁっぁぁああああああああああああああ――――――！」

口からは涎が垂れ落ち、胸全体がじわあ・・・と灼けつくように熱くなり、その熱が異様に気持ちよい。あまりの良さに２Ｂの回路は快感に陶酔し、五秒ほど何も考えられなくなった。

「あっ・・・・あ・・・・あぁぁ・・・・ああぁぁぁぁ・・・・・・・・」

凄まじい胸絶頂を迎えたが、触手の責めに終わりはない。次もまた口触手が乳首を吸い上げ、収まるよう下降し始めた絶頂感が、また蘇ってきてしまう。

「あぁぁぁあ！あぁっ！あうぅぅぅぅうっ！ひあ、ああっぁああっ！おかしく、な、あぁぁあ！」

乳房以外にも、２Ｂの身体を撫でまわし、嘗め回し、擦り回している触手たちのあらゆる感覚が連動し、乳首絶頂への燃料をどんどん投下してくるのだ。我慢どころか、この快感でおかしくならないようにするので精一杯なのだ。

「あぁぁぁああ――――――――！」

また２Ｂが凄まじい快楽絶頂を迎えたが、責められているのは胸だけではない。

こちらは大本命の股間の一線で、クリトリス、膣、アナルの三つの最も感じる性感帯を責められている。

（い、いまクリトリスを吸われでもしたら・・・！）
危険な懸念が２Ｂの脳裏をよぎった。今でもぬるぬる触手にクリトリスを舐め回されていて、すぐにでも絶頂がやってきそうなところを、乳首責めのように峻烈な快感を上乗せされてしまったら、神経回路が灼けてしまうかもしれない。
しかし、２Ｂの憂慮はクリトリスだけではない。ずっと表面だけ舐めていた舌触手が、一斉に膣の中に挿り込んだのだ。
「あぁっぁあああぁぁっぁぁっぁあああ！」

～中略～

「あうぅ・・・・あぁ・・・・イイ、あぁぁ、も、もう、いらなっ・・・・・あぁぁっ・・・・・！あっ・・・！あぐっあぐっ！あぐぅうぅっ！」

あれから何時間経過しただろうか、超強力媚薬を身体の内側と外側から染め立てられ、どこまでも快感が欲しく、どこまでも快感を感じられる身体になってしまった。
身体は触手が吐き出した白液でべとべとに濡れそぼり、凌辱の後が色濃く残っていて、淫猥極まりなかった。
２Ｂの欲望に応えるべく、触手たちは想像をはるかに上回る凄悦を与えてくる。あまりの快感に何度失神したかわからないが、そのたびにまた絶頂快感で目覚めさせられ、延々と絶頂を感じているに等しい快感を味わわされてしまう。しかし、実際に体中のどこかが必ずイッていた。アナルがイくときもあり、クリトリスがイクときもある。女陰が絶頂し、同時に乳房も絶頂するときもある。
どこかが必ず絶頂を迎えていて、２Ｂは休む間もなく常に絶頂状態を突き付けられ、しつこく白濁液をぶっかけられ、飲み込まされ、終わりが見えない快楽監獄に嵌らされていた。

「んんっ！いっ・・・・・！あぁぁあああああああああああっ！あぐぅ、んむっ！んんんんっ！んぐっ、ごっ・・・！んんんんん――――――――――――――！」
激しく嬌声を上げたところを触手に捉えられ、口の中に極太触手を突っ込まれてしまう。熱く滾る白濁液をまた強制的に飲み込まされ、身体は常に強烈な発情状態だった。

「んむっ・・・おっ・・・ごほっ・・・おお・・・おぉ・・・・・・」

２Ｂの口と、離れた触手の間に唾液がつながり、触手が離れて完全に切れた。その様子をスローモーションで眺めながら、２Ｂは女陰で絶頂を感じていた。

「ひぐぅぅぅぅっ！ううっ！うあぁぁぁぁあああああ！」
あまりの快感に意識が何度も飛ぶ。また失神しそうになったが、乳房に巻き付いた触手が上下にプルプルと揉み動かし、２Ｂに覚醒を促してくる。

「はぁあぁんっ！あぁあぁあっ！あああぁぁぁっ！熱っ・・・！あぁぁああっ！」
乳房にも秘裂の中にも白濁が掛けられ注入され、２Ｂは快感の槇を強制的にくべられる。

（いつ、いつになったら・・・終わるんだ・・・）
絶頂で吹き飛ぶ理性が一瞬戻るとき、思うのはその疑問だけだった。しかし、触手の猛攻によってそんな疑問はすぐに消失し、快楽を感じることの一点に意識が集中してしまう。
ゴツゴツと女陰に挿入した触手が突き上げ、何度も絶頂の波が襲ってくる。

「あぁぁああっ！あぁぁぁあああああああああ！」
またドクン、と胎内に大量の液体を噴出され、２Ｂはイキ果てた。しかし、触手は液体を胎内に注いでも、まだ出る気配は無い。延々と液体を出し続け、２Ｂは一瞬膨れた自分の胎を想像したが、胎内が満たされた感じを味わった直後、すぐに触手は抜き出て、２Ｂは破裂から解放された。
そして、体中を愛撫しまくっていた触手の動きが緩やかなものになって、一部では離れていく触手すらある。

（・・・？なんだ、どうした・・・んだ・・・？）
そして股間にずっと食い込んでいた極太触手が離れ、久々に両足の間を解放された。
明らかに変わった動きをする触手群に、２Ｂは不審なものを感じたが、身体を灼く淫熱が、彼女に深く考えることを許さない。

「うぁぁぁあっ・・・あ、あぁっぁあああっ・・・！」
（早く、早く快感が欲しい・・・！）
そんな淫らな想いが脳裏をよぎり、２Ｂは快楽を渇望してしまう。
体中を責めていた触手がほとんど動きを止め、２Ｂを空中にとどめるだけになってしまう。
左右に大きく開かされた中心が疼く。両手が自由ならば自分で掻きむしってしまいたいほどの衝動が湧きあがるほど、快感を我慢することが、今の２Ｂには耐えられない事態だった。

「はあ、はぁ、イカせてぇ・・・・イカせて・・・」

２Ｂの口から、彼女が言っているとは信じがたい言葉が紡がれるが、その貴重さを知るものは周囲にいない。もう身体の中心から淫熱がどんどん湧きあがり、噴火した溶岩のように体中に沁みわたって、とにかくどこでも良いから触ってほしくて仕方がない。
刺激が無くなった途端、我慢しがたい疼きが２Ｂに残留し、早く快感が欲しくて堪らなくなる。
そんな２Ｂの開かれた両足の間に、一本の触手が近づいてきた。

「あぎいいいいっ！んぁぁぁあああ！」
その触手の先端は人間の口と同じ形容をしていて、一気に２Ｂの肥大したクリトリスに吸い付いた。

かつて「この口触手でクリを吸われでもしたら、どれだけの快感が訪れるだろうか」と戦慄したことがあったが、今まさに、その激励を受けている。
チュウチュウとクリトリスを吸われ、電撃に等しい快感が身体を駆け巡り、２Ｂは一瞬で絶頂へと昇り詰めさせられた。

「あぁぁぁあぁぁあああああああああああああ――――――――――――――――――！」

クリ以外の部分は快感を遮断されて、一点に集中するかのように責められているクリトリスは、風が吹くだけで悲鳴が出そうなほどに敏感になり、稲妻のような激悦が下半身を駆け巡った。
女陰がキュウウウと締め付けられ、愛液がボタボタと落下する。クリトリスに感じた快感はまさに別格で、ずうんと重い快感が腰の奥を痺れさせたと思うと、身体がジーンとする心地よい痺れに転換してゆく。
そして、触手の吸い方も一定ではなく、何度もチュウチュウと吸い上げたり、チュッチュッと小刻みに吸い上げたりと、技巧を凝らして何度でも責めてくる。

「あぁっ！あっ！あっ！あっ！あっ！あっ！あっ！あぁぁぁあ！」
吸い上げられるたびにスパークする強力絶頂がやってきて、２Ｂは腰をビクンビクンと痙攣させ、連続するクリトリス絶頂に宙吊りにされた身体を揺らしまくった。
口触手の中には人間の歯まであつらえていて、その硬い質感でコリコリと肥大して頑なったクリトリスを甘噛みされると、電撃に打たれたかのような激悦が訪れる。
「はぐぅぅぅう――――――――――――――――――！」

性感神経の回路がショート寸前なほどの激悦が訪れ、２Ｂは腰をカクカクと動かし、身体を揺らしてこの世のものとは思えない法悦を味わわされる。
さらに口触手の内部には人間と酷似した舌まで取り付けられ、歯でカリカリと甘噛みされるクリトリスを、上から柔らかく熱い舌でぬるぬると舐め回してくる。

「あがぁぁぁあああ！あぐぅぅっ！うぁぁあっ！あぁぁぁぁあああああ！イク、イク、もう・・・イッ・・・・！あぁぁぁあああああああああああ――――――――――！」

とんでもない激悦が下半身に巻き起こり、じゅわあ・・・と耐え難いがそれが良いと感じる快感の熱が下半身を中心に広がってゆく。

「あ・・・・あぁ・・・」
あまりの快感に意識がどんどん落ちてゆき、目の前が暗くなる。しかし、２Ｂには気絶することすら許されなかった。
あまりの法悦に２Ｂの意識は闇に沈もうとしたが、またクリを口触手に吸われて意識を覚醒させられた。
「ひいいいいいっ！ひぁぁぁあああああああああああ！」
２Ｂが叫び散らす中、口触手の中の舌が二本に増え、子供の小指ほどの大きさのクリトリスを左右から舐め責めてゆく。

「あぐぅぅぅっ！ぅぅぅっ！あぁぁぁあああっ！あっ！あっ！あっ！あっ！だめっ、だめっ！それだめっ！」

（気持ちいい！気持ちよすぎる！）

クリが蕩けるような快感を与えられ、２Ｂの腰ががくがくと前後に震える。そんな中でちゅう、と吸われれば、一気に絶頂の法悦へと昇らされてしまった。

「あぁぁあああああ・・・・・・」

あまりの気持ちよさと心地よい絶頂感に、２Ｂの意識と身体は耽溺し、快感を悦びとして受け入れている。

そんな中、またキーンと空間に反響音が響き、どこからともなく声が聞こえてきた。

『アンドロイド、キモチイイか？あんまりイキすぎると、またクリトリスが大きくなるぞ。気を付けろヨ』

機械生命体に投げかけられた言葉で、２Ｂはゆっくりと我に返った。

三角木馬で受けた、男性器と化した自分のクリトリスへの凄絶な責めを思い出し、２Ｂは息を詰まらせる。しかし、クリで受ける快感は別格で、とても我慢できるものではなかった。

「あぁっ！ああっ！あっぁあっ！ああっ！いや、あぁぁあっ！あ、気持ちいっ・・・！あぁぁ、だめぇえ・・・」

気持ちいいのか、止めてほしいのか、判然としない言葉を吐きながら、２Ｂはすぐに絶頂に昇らされる。イキすぎるとさらに感じるようになってしまうというのに、自分ではイクのを止められない。それほど最高に気持ちが良かった。

「あぁ・・・あ・・・あぁぁあぁあ・・・・」
（気持ちいい、自分では止められない、身体が、勝手に快感を追っていく・・・！）

そして突如、二本の舌が激しく動き回ってクリトリスを舐め回し、急激な吸い上げと歯の甘噛みが同時に施された。

「あぁぁあああああああああああああああ――――――――――――――――――――！」

突然訪れた脳が蕩ける激悦に、２Ｂは喉を反り返して快楽を叫ぶ。
「ひあっ！あぁっぁあっ！あぐっぅぅぅぅうっ！んぎっぃぃぃっ！あぁっぁあああああっ！はぁっぁぁあああああああああ！」

責められている間、何度も絶頂の悦波が襲ってくる。しかし、２Ｂがイッても触手は動きを止める気配は無く、一方的にクリトリスを容赦なく苛んでいる。

『ほらほら、イキすぎるとチンポだゾ？』
「くぅぅっぅぅぅぅぅっ・・・・！うあっぁあああああっ！あぁぁあっ！あっ！あっ！あぁぁあああああっ！」

機械生命体に揶揄されるが、快感は止まらない。スポンジのように快楽を吸い上げ、２Ｂの身体はどんどん芯から熱が沸き上がる感触を覚えた。

「ひいいいいいっ！ひいいっ！いいいいいいいいいいいっ！」

ひと際大きな絶頂を迎えた直後、２Ｂのクリトリスが猛烈な熱を持ち、貫かれたような激感が伝わってきた。身が灼けるほどの熱が下半身を貫き、息が止まるほどの激感に喉すら収縮する。

「あぐっ・・・・！がっ・・・・・！」

痛みではないが、あまりの衝撃に２Ｂは声をまともに出せず、その激感に身体全体を震わせる。

そして、ようやくジンジンと余韻を残すその激感が去った後、２Ｂのクリトリスはさらに肥大し、弾籍の形状になっていた。

「あっ・・・・うぁあああああああああああああっ！」

絶望の声が響く中、２Ｂの肥大クリトリスがゆらゆらと揺れる。完全に硬く勃起し、触れられていないのに先端から粘液が垂れ下がって、いかにも淫らな様だった。

『ハハハ！イキすぎたナ！チンポができてしまったゾ！さあどうすル？そいつらの玩具のマトになるゾ！』

確かに、ツンとそそり立った性感神経の塊は、今にも触れてほしそうに存在していた。刺激が欲しくて、早くも先端から粘液を零し、裏筋に流れて、その感覚だけでもゾクリとしてしまう。

（し、しまった、今のこんな状態で責められたら、狂う・・・！）

しかし、２Ｂの肥大クリトリスは、刺激が欲しくて早くも疼き始めていた。あの触手に巻き付かれて、乱暴に擦られることを想像するだけで、ヒクヒクと腰が勝手に動いてしまう。

「も、戻す方法・・・は・・・っ！」

『イキまくれば治るかもしれなイ。せいぜい、泣きクルエ。たくさん出セ。がんばれヨ！』

機械生命体は残酷な現実を突き付けてくる。しかも、「かもしれない」という不確かな答えしか返ってこず、２Ｂは焦る一方だ。

「ふあっ・・・・！」

早くも大きな舌触手にベロリと舐め上げられ、ゾクゾクと快感が立ち上がる。

これまで責められていたクリトリスとは段違いに感度が上がっていて、もっと欲しくて触ってほしくなり、その欲望はこれまでの焦燥感の比ではなかった。

「んっ・・・ぐっ・・・！くぁっぁあああ・・・・！」

耐えきれず、２Ｂは切なそうな甘い声をあげる。そのまま下半身を突き出し、さらに触手に触れさせられやすいよう、自分から身を捧げてしまう。

～中略～

「あっ・・・あぁ・・・あぐぅ、あぐっ・・・んぐぅうぅっ・・・！」

２Ｂは今、身体を地面と平行にされて上を向いて吊るされ、大の字に縛られている。両手も両足も左右に大きく開かされ、一切抵抗ができない状態で体中に責めを受けていた。
あれから五時間、２Ｂは淫乱なクイズを仕掛けられて、間違うたびにペナルティを増やされ、今や体中にはあらゆる触手が這い回り、全身をくまなく愛撫され続けている。
もはやクイズになど回答できる状態でないことは機械生命体はわかっているだろうが、それでもムチャな質問は続けられた。
両乳首にはバキュームする口触手がとりつき、縄触手で乳房もこね回されている。下半身は膣に何本もの細い触手が挿り込み、それぞれが違う動きで洞内を荒らしまわり、常にＧスポットが刺激されている状態だった。アナルにも二本の触手が陣取り、一本が引き抜かれると入れ替わりにまた一本が挿り、また出ると挿りを繰り返している。二本の触手は形状が異なっていて、一方は疣を備えた触手、一本は、いくつもの球体が等間隔に配置されたボール触手だった。この二本が絶えず交互にアナルを穿り、結腸に届くまで深くへと挿入され、目がくらむ快楽を連続して味わわされている。
肥大クリトリスにはまだ口触手がとりつき、根元まで飲み込んで口の中の糜爛で表面を責めまくっている。
今２Ｂを刺激している触手の中身は、無数の異なる硬さの疣がついていて、前後に擦られるたびにそれらがバラバラの感覚で肥大クリトリスを刺激し、身悶えせずにはいられない快感を伝えてきている。

「うぁぁああっ！あっ！あぁぁあ・・・っ！はあ、ぁぁぁああ・・・！」

『さあ、何番だ？』

機械生命体の声は、飽きることなく２Ｂにしつこく質問を繰り返している。ほとんど継続していると言ってよい絶頂感を身体に孕んだ２Ｂには、思考能力など存在していなかった。機械生命体に何を質問されても、正解どころかまとにも答えることもできない。

肥大クリトリスは絶えず責められ続け、様々な感触で絶頂を強いられている。中には明らかに番号の中に入っていなかった動きのものまであり、２Ｂは快楽にむせび泣くしかできなかった。

「あごっ・・・！おごおおおおおっ！おおっ！んおおおおおおおおおっ！」

中がゾリゾリとした感触の触手が激しく肥大クリトリスを擦り上げている。性感神経を直接擦られているかのような激感に、たちまち絶頂快楽が迫ってくる。その中ですでに三度射精したが、機械生命体は２Ｂに答えることを許さず、ようやく質問されたところだ。

「あぁぁあああっ！あおおっ！い、一番んんんっ！」

もう何でもよいから番号を叫ぶしかできない。とりあえず番号を言えば、正誤にかかわらず止めてくれるからだ。ただし、確実に間違っているので、ペナルティと言う名の新たな責めが加えられる。

『不正解！正解する気はあるのカ？また最初から覚え直すカ？』

あまりに正解しないので、その理由づけにこれまでに２Ｂは一番から十番を五回味わわされている。しかし試される順番はいつもシャッフルされていて、一番だったものが五番、六番だったものが三番になっていたりで、２Ｂは余計に混乱をきたした。

「ふぁぁ・・・そ、それはダメぇ・・・・」

必死に喘ぎながら拒絶の声をかろうじて上げながら、２Ｂはまた射精絶頂を迎えさせられる。

「あぁぁあああああああっ！」

『それにしても本当にバカなアンドロイドダ。一問も正解しないとハ、あきれル。これはペナルティとは違ったバツが必要だナ』

体中を責められてあちこちで絶頂の快楽を味わっている２Ｂを睥睨しているのか、機械生命体が呆れ声で言い放つ。

『そのメスチンポに罰ダ！覚悟しロ！』

「あああんっ！」

肥大クリを責めていた触手が急に引き抜かれ、２Ｂは甘い悲鳴をあげる。途中で快楽を止められた性感帯は、隆々と天を向いていた。

（よ、ようやく終わったか・・・？）

はあはあと荒い息を吐きながら、２Ｂは一瞬訪れた快楽からの解放に安堵する。しかし、肥大クリトリス以外の場所は相変わらず激しく責められているので、身体の悶えを抑えることはできない。

「んんっ・・・！あぁぁあああっ！」

Ｇスポットをぐりぐりと抉られ、愛液が吹きこぼれる。それを挿り込んだ触手が吸い上げ、中も吸引されて、また快感が上乗せされる。

機械生命体に肥大クリトリスへの新たな責めが開始されたのは、その三分後だった。

２Ｂの目の前に、糸が垂らされた。正確には、糸と等しい太さの触手だ。その触手はクイクイと動き、２Ｂの肥大クリトリスの先端に向かう。

糸と等しい太さの触手には、等間隔に、パチンコ玉をさらに小さくした極小の球が並んでいる。その最先端にも球体は取り付けられていて、それは肥大クリトリスの精液が吹き出る部分、尿道を狙っているようだった。

（まさか、そんなこと、できるわけが・・・）

２Ｂの脳裏に嫌な予感が走った直後、先端が尿道の入り口に強く押し付けられる。

「うあぁぁあぁ・・・っ！」

最も感じる部分を圧迫され、純粋な性的快感に声が出てしまう。

先端の球体が尿道部分に埋め込まれると、糸触手は動きを止めず、次々と球体を伴った自分の身体を尿道へ埋めてゆく。

「ひぁぁっ・・・っ！ああ、ぁぁあぁあっ・・・ああ、あぁぁああ・・・・！」

射精絶頂とはまた違う種類の快感に、２Ｂは高い声を上げて善がる。出すべき場所に挿入されて、感じるのは妙な気分だったが、苦痛とは明らかに異なっていた。
球体を生えそろえた糸触手はずぶずぶと中へ挿ってゆき、突き当りに差し掛かったらしく、動きが止まった。根元まで突き進んだのだと２Ｂは戦慄したが、次の触手の動きを待つしか手段はない。

「うぐっ！」
肥大クリの根元部分に強烈な圧迫感を感じ、２Ｂは手足をバタつかせた。

「うあっ！あぁっ！うぁぁあああっ！」
（なんだこれ？なんだこれは？）

絶頂の直前を止められたのと似た快感が下半身を走り、２Ｂはわけが分からないまま声を上げる。その不可解な快感を抱えたままだが、糸触手はツプツプと尿道内に侵入した。
「んぐっ・・・・うぅぅうぅっ・・・・」

『ハハハ、全部挿ったカ？気分はどうダ、アンドロイド』

「・・・・・・・」
（そんなもの最悪だ）

声に出して言いたかったが、口を開けば情けない嬌声がこぼれると察知していたので、唇は閉じたままだった。

『さあ、仕置きダ！泣きわめケ！』

機械生命体が言い放つと、尿道内に挿った触手がピンと伸ばされ、そのまま力強く尿道から引き抜かれていった。

「あぐっ！あぐあぁぁっぁあぁぁっぁあっぁぁあああああああああああああああ！」

球体の一粒が出るたびに、射精絶頂に匹敵する激悦が訪れ、それが秒単位で連続して巻き起こる。

「あぎいいいいいいっ！あぐっあぐっ！あごおおおおっ！んおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！」

神経回路が灼けつくような凄悦が次々と注がれ、２Ｂはただ連続絶頂に身悶え、身体を震わせるだけだった。じっくり時間をかけてイカされるような濃厚な絶頂感が連続して打ち付けられ、まるで身を削がれているかのように激しく感じる。身も心も屈服させるこれまでに感じたことがないほどの凄まじい快感に、２Ｂは喚き狂った。

「あぐっ！あぐっ！あぐうぅぅうっぅううっ！うあぁぁあああっ！あああっ！あぁぁぁあああああっ！あがぁぁあっ！ひぎいいいいいいいいいっ！」

尿道の中に挿った十数個の球体が引き抜かれたところで、触手の引き抜きが止まる。その途端、肥大クリトリスの根元に尋常ではない圧迫感と牽引感を感じ、２Ｂは息をつめた。

どうやら根元で一個の球体が膨らんでいて、それがこれ以上の触手の動きを停止させているらしい。

「あぐうぅぅうぅっ・・・うぁぁあああああ・・・！」

ピンピンと何度も引っ張られて根元が刺激されるたびに、２Ｂの身体がビクビクと激しく痙攣する。肥大クリごと持っていかれそうな激悦を感じさせられ、すでに快感で虫の息になっている２Ｂに追い打ちをかけるように、触手は２Ｂを容赦なく感じさせる。

「んぐうぅぅぅうっ・・・！」

触手が最大限まで引っ張られるが、根元の球体は抜けない。絶頂できない苦しさと、ずっと続く絶頂直前の最も気持ちが良い瞬間が延々と続けられ、２Ｂは何も考えられなくなっていた。

『効くカ？アンドロイド。これからダ、これから責めは本格的になるゾ！』

機械生命体の言葉が終わった瞬間、引っ張っていた触手が力を抜き、伸ばされたゴムのように一気に根元に向かって糸触手が尿道に潜り込んでゆき、最後に根元へ「バチンッ」と強力極まりない激感が生じた。

「あぐうぅぅうううううううううううう！」

まるで肥大クリの根元を中から殴打されたかのような激烈極まりない感覚だった。この衝撃に比べたら、これまでの触手の責めはぬるいと言ってよいほどこれは強力で、性感神経の回路がショートして灼けそうなほどの絶対的激感が２Ｂの下半身を打った。

「あぐっ・・・あぐっ・・・あごぉ・・・あっ・・・がっ・・・・あぁ・・・」

口を開いてビクンビクンと痙攣する２Ｂをしり目に、中に挿った触手はまたもや引き抜きを開始し始めた。

「ひいっ！ひいいいいいいいいいっ！」

休む間もなくまた連続絶頂が続けられ、２Ｂは悲痛な嬌声を漏らす。だが、一度味わった強烈な快感が、また欲しくて身体は勝手に触手を受け入れてしまう。

「うあぁぁあああああああああああああああああ！」

ずるるるる、と糸触手が引き抜かれ、秒単位で連続絶頂が訪れる。もう肥大クリ全体が絶頂の神経器官に成り代わって、風がそよいだだけでも絶頂してしまうほど鋭敏になり、最高の快楽を極めてしまう。

「ひぎいいいっ！」

また根元でひっかかる感触が襲い、２Ｂが悲鳴を上げる。そして、また繰り返された触手の逆巻きの衝撃が根元を殴打する。

「あぁぁぁあああああああああっ！」

身体の芯の性感神経を直接殴打されているかのような衝撃に、２Ｂはなすすべもなく一方的に感じさせらえる。この衝撃だけで、絶頂１０回に相当するほどの激感があるのではないかと思われるほど、この責めは激しかった。

～中略～

「んあぁぁあああっ！」

ガクガクと身体を揺らして快楽に身悶える２Ｂだったが、動けば射精絶頂が待っている。肉棒だけでなく、同時に責められ続けた乳房も、ゆさゆさと揺れるたびに頭が蕩けそうな快感がゾクゾクと押し寄せていた。
２Ｂの強い意志でなければ、とっくに堕ちていても不思議ではない身体の状態だったが、２Ｂは幸か不幸か、耐え忍んでしまっている。
アンドロイドの一人が指三本を集めた太さのディルドを用意し、長髪のアンドロイドに渡す。渡されたアンドロイドは、そのディルドで２Ｂの股間を前後に擦り始めた。

「んごごっ！おおっ！んおおおおおっ！こ、擦るのダメ、あぁぁぁあああっ！」
ディルドの細かい凸凹がミリ単位でわかるほどに女陰は敏感になり、震わされる肉棒にも快楽が伝わってくる。ドクンドクンと快楽が迫り、しかしイク寸前でディルドの動きは止められてしまった。

「んふふ、２Ｂちゃん可愛い・・・」

「っ！んぁぁあああっ！」
突然女陰にディルドを一気に突き挿まれ、２Ｂは股間を貫かれる快感に、背中を激しくのけ反らせて反応した。突然の挿入刺激に、軽くイッてしまう。

ディルドは根元まで埋め込まれると、底から伸びている二本の紐で左右の太ももに括り付けられる。ディルドが滑り落ちないようにされたのだ。
そんなことをされなくても２Ｂの女陰はディルドをキュウキュウと締め付け、たらたらと愛液を垂れ流している。

「それじゃあ、始めようかしら。まずはおチンポの調子を見てみましょうね」

「なっ・・・！や、やめろ、触るな！」
上下に振れただけで絶頂する肉棒を再び標的にされ、２Ｂは焦りの声を上げる。しかし、長髪のアンドロイドは当然そのような言葉は聞き入れない。

「ふふ、見事なおちんちん・・・」

そう言ってすべすべの掌で裏筋を上下にゆっくりと擦る。

「ふおおぉぉおおおぉぉっ！おっ！あぁぁあっ！」
たったそれだけの刺激で２Ｂの肉棒の先端から白液が吐き出され、射精絶頂を迎えてしまう。

「ふふ、敏感・・・」
そう言うと、アンドロイドは手の動きをどんどん早め、摩擦力を上げてゆく。

「あぁぁぁぁぁあああああっ！あぐぅうぅぅっ！ひぐっ！うぐっ！い、イク、あぁぁっ！出る、出てる、んぎいいいいいっ！イクううううう――――――――！」

くちゅくちゅと音を立てながら肉棒を上下に擦られ、連続して白液が迸る。十五回ほど射精したところでようやくアンドロイドの手は止まり、２Ｂは身体の力を一気に脱力させてぐったりと頭を垂れた。

「うぅぅ・・・・・」

「ふふふ、２Ｂちゃんの可愛い姿、自分で見てみる？」

そう言われて顎をとられ、無理矢理顔を上げさせられる。すると空中に画面が浮かび上がり、そこには責められている自分とそれを囲むアンドロイドたちの姿が映されていた。
２Ｂは逆さづりにされ、両足を左右に大きく開かされてＴ字型に拘束されている。

『今度はこの棒に新しいアタッチメントを付けたわ。ブラシの硬さがそれぞれ違うから、２Ｂちゃんはもっと楽しめるはずよ？』

黒い棒にブラシが取り付けられ、数本の棒が一斉にかかり、ジョリジョリと鋭敏な２Ｂの肉棒を擦り始める。

『あごおおおおおっ！おおおおっ！おあぁぁぁぁあああぁぁぁぁあああ！』

ビシャビシャと白液が吐き出され、２Ｂの美しい顔面に滴り落ちる。

『ほらほら、自分が吐き出したものなんだから自分で飲んで処理しないといけないじゃない？しっかりしてよ、２Ｂちゃん』

激烈なブラシ摩擦責めをされながら、顔を上げさせられて顔面に精液を受けさせられる。

『ぶっはっ！んごっ！おおっ！んごおおおおっ！ごくっ・・・んぐ、んぐぅぅぅぅうっ！』

四本のブラシを備えた黒い振動棒が、全方向から２Ｂの肉棒を擦り立てる。裏筋を縦にジョリジョリと擦り、その反対を横方向に擦られ、根元を円を描くように擦られる。

もっとも効果があるのは先端責めで、極めて敏感になっている尿道口をこれで責められるのは、悦楽の地獄だった。

もっとも敏感な尿道口をジョリジョリと責められ、鋭いほどの快感が下半身を突き抜ける。

『あぁぁぁぁぁあああああああっ！もう、もうだめえええええええ！やめてえええええ！えっ！えっ！あぎいいいいいいい――――――――――！』

一擦りごとに射精絶頂を迎えているような２Ｂに、この責めは過酷すぎる。しかし、２Ｂの性感回路はこれらの刺激をすべて余すことなく快楽ととらえて変換する仕様にされている。快楽の取りこぼしは許されない。

『あら、止めて欲しいの？じゃあ、２Ｂちゃんが気持ちいいって言ったら止めて上げる』

『んごおおおっ！気持ちいい！気持ちいいいいいい！あああぁぁぁぁあああああぁぁぁぁぁあ！気持ちいいいい――――――――――！』

自分の精液で顔を汚しながら、２Ｂが絶叫する。

『ふふ、気持ちいいならどんどん続けないとね・・・』

裏切られた言葉に２Ｂは言葉もなく、ただ連続絶頂を重ねられる。
振動を受けながらブラシで摩擦され、絶頂電流を同時に流される快感は、もはや普通の人間では耐えられるものではなかった。

「うふふ、いい感じで撮れてるでしょ・・・？」

「くっ・・・」
２Ｂは顔を背けようとしたが、責められている自分の姿を見て、肉棒が熱くなるのを感じていた。その証拠に、先端からはなにもされていないのに先走りの液が垂れ始めている。

「ねえ、どお？」

長髪のアンドロイドに肉棒を掴まれ、裏筋を親指で上下に擦られる。

「ひぎゃっ・・・！あぁぁぁあっ！」
自分が責められる姿に興奮していた２Ｂは、待ちかねた刺激に悦ぶように射精絶頂を放った。

「ねえ、２Ｂちゃんの一回の射精って、普通の人間の男の十倍の快感があるらしいわね。それってどれぐらい気持ちいいの？」

「はあ、はあ、はあ、はぁ、はあぁ・・・・」
しばしの休息を与えられるが、一度火が付いた性感帯は、次の快感を求めて疼き始めている。
一体何度絶頂させられればこの淫虐は終わるのだろうか。責められている間は無上の愉悦を感じて何も考えられないが、少し意識が戻るとここから脱出する手段を考えている。
２Ｂのしたたかさがある限り、この責めは続くのだと、本人は理解していなかった。

「ねえ、どれぐらい気持ちいい？」

再び肉棒を掴まれ、上下に激しく擦られる。

「あぁぁぁぁぁあっ！ああっ！出る、あぁぁぁぁあっ！」
しかし今度は、先端も掌で激しく左右に摩擦される。シュシュシュ、と激しく素早く擦り立てられ、たちまち射精絶頂がこみ上げて、あえなく２Ｂは絶頂した。

「あっ！あっ！あぁぁぁぁあああああっ！」
黒い棒とは違い、比較的甘い快感がこみ上げ、２Ｂの頭が蕩けかかってしまう。

そんなとき、女陰に突き込まれたディルドを上下に挿出させられた。

「はぐうぅぅぅうぅっぅうううっ！うぁぁぁぁあああああああ！」

これまでチンポ責めで散々性感を高められ、放置されていた膣にようやく刺激が訪れる。あまりの快感に、意識が飛ぶ。しかし、動きはすぐに止められた。

「あぐっ・・・うぅぅぅうう・・・」

「２Ｂちゃんにはもっと素直になってもらわないと・・・これから快楽の拷問タイムね」

すると周囲のアンドロイドが２Ｂを囲み、拘束された体中に愛撫を施してくる。全身が性感帯になっているに等しい２Ｂには、どの感覚をとっても最上の快感だった。

「んぐうぅうっぅうっ！あぁぁああっ・・・！」

背後から両乳房を揉みしだかれ、甘い快感に蕩けそうになる。乳首を黒い棒で振動させられ、スパークが加わり、一気に乳房絶頂へと高められる。

「うあっ！あっぁあっ！あぁぁあああ！」

もちろんこれまで標的にされていた肉棒にも容赦なく責めの手が伸びる。あらゆるアタッチメントを付けた黒い棒が全方向から肉棒を責め擦り、射精を止まらなくさせている。

「あぐうぅぅぅっ！あごっ！あおおおおおおお！おおっ！おぁぁあああああああああ！」

下半身からビシャビシャと精液が吐き出され、地面がたちまち水たまりで濡れた。
２Ｂは体中を責められながら焦りも感じていた。
ディルドを突き挿こまれたままである女陰が一切責められないのだ。
体中を責められて極上の快感に悲鳴を上げるが、股の間が疼いて堪らない。愛液はだらだらと零れ落ちて、水たまりにどんどん加えられた。
（疼く、疼く・・・！あああ、我慢できない、誰か、ここを責めて・・・！）
気の強い２Ｂがそう願ってしまうほど、女陰の焦燥は耐え難いものだった。それを見越したのか、長髪のアンドロイドが２Ｂに囁きかける。

「ふふ、ここ責めてほしい・・・？」

そう言いながら、ディルドの底を指ではじく。たったそれだけの刺激で、潮がしぶいた。

「んぐうううぅうっぅっ！」
絶頂できそうなのに、できないもどかしさに、２Ｂは歯を食いしばって耐える。愛液が一層量を増やして流れ出し、２Ｂの太ももはビショビショだった。

「ほらほら、チンポがどれぐらい気持ちいいかまだ答えてなかったわね。はっきり答えてくれる？」

振動する黒い棒に、ヌルヌルの粘液をまとったモップ状のブラシが取り付けられている。それでじゅるじゅると２Ｂは肉棒の裏筋を上下に擦られ、鳥肌立つほど気持ちよい感覚に身体を震わせる。

「んぁぁぁぁあああっ！」
ぬりゅぬりゅと音を立てながら、肉棒全体を撫で擦られる。円を描きながら裏筋や先端を摩擦し、吐き出される精液がさらに滑りを良くして、気持ちいいのがどんどん上昇してゆく。
「あぁっ！あっ！あぁっぁぁあああっ！ふぁぁあっ！あっ！あがあぁぁぁあああっ！あぁぁあっ！」

～中略～

「ねえ、２Ｂちゃんって生意気じゃない？」

２Ｂの肥大クリを犯しているアンドロイドが、意味ありげに声を高めた。それを察した二人が口に笑みを浮かべ、互いに目を合わせて了承する。

「そうね、すっごく生意気だと思うわ！」

「ちょっとこれは問題よねー」

「あぐっ！あぐっ！あううあっ！あぁぁっ！あっ！ぐあっ！あぁぁ、あああっ！あぁあああああっ！あぐあぁぁ！」

ただ一方的に蹂躙され、まともに言葉すら紡げない２Ｂのどこに鼻につく要因があるだろうか。いや、無くても良いのだ。アンドロイドたちには関係はない。

ただ、２Ｂを虐めたいだけで彼女たちは勝手に２Ｂを罪人に仕立て上げる。

「じゃあ、罰を与えないといけないわね」

「そうね、この罰を与えましょう？」

輪姦ショーを囲っていた一人のアンドロイドが、両手に怪しげな薄皮を持ってそれを三人に差し出す。

「はあっ・・・！ぁぁあ・・・・・」
じゅぽん、じゅぽん、と音をたて、アナルと女陰から肉棒が引き出される。
肥大クリを犯していたアンドロイドも腰を引き、快感からようやく解放したが、絶頂感は相変わらずとどまったままだ。

「はひぃ・・・はぁ・・・あぁ・・・・・・・・・」
アナルと女陰から快楽がなくなったとはいえ、肥大クリの絶頂感はすさまじく、胸の振動愉悦も続いたままだ。今の２Ｂに、まともに物を考えられる瞬間はない。

「うふふ、これ使うの久しぶりねエ」

「２Ｂちゃん壊れちゃわないかしら」

「大丈夫よ、壊れたら直せばいいんだから！」

三人がそう言いながら、己の肉棒にコンドームの先端が切られたような、薄皮の筒を嵌めてゆく。
２Ｂの肥大クリにも同じものが被せられた。
強く締るわけでもなく、何も被せられていない状態とほとんど感触は変わらない。
そして、２Ｂの快感でビクビク痙攣する身体を捕まえると、装置を付けたアンドロイドがそのアナルと女陰を犯した。

「あっ・・・！あぁっぁあああっ！」

激しくのけ反る２Ｂの身体だったが、その直後に異変は起こった。
肥大クリに、超絶と言える快感が降って来たのだ。

「んおおおおお――――――――――――――――――――！」

キン、と氷が割れてグラスにぶつかったかのように突然訪れたその快感は、発生源が特定される困惑でますます２Ｂを苦しめる。
全方向から熱く柔らかい何かで締め付けられる快感、それが二重に重なった感覚が肥大クリに巻き起こり、２Ｂの身体がビクンビクンと跳ね上がる。

「なんで気持ちいいかわからないかな？じゃあ、答え合わせ！」

女陰に挿入していた肉棒が振動を始め、中を責めた瞬間、肥大クリも振動を味わった。

「ああああああああああああああああああ！」

「うふふ、わかった？今２Ｂちゃんがクリチンポで感じてるのは、自分のおまんことお尻の感覚だよ。どお？すっごい気持ちいいでしょ？気持ち良かったら気持ちいいって言いなさい？」

そう解説しながらアンドロイドが肥大クリを指先でクリクリと弄ぶ。アナルと女陰を犯す二つの肉棒と快感が共有され、凄まじい愉悦が流れ込んでくる。しかし、感じるだけで実際の刺激は無いからこのま

までは射精することはできない。射精絶頂の快感はとどまったままだが、それなのにまだ射精したいという矛盾した気持ちが芽生え、焦れる気持ちに思考回路が焼き切れそうだ。

「さあ、どうかしら２Ｂちゃん。少しは反省した？」

「んあああぁぁぁぁあぁああ！あぁぁあああああああ！」

肥大クリを天井に向けて突き上げ、疑似射精を繰り返して腰が勝手にカクカクと動いてしまう。

「ふふっ、無様―」

「しっかり責めてあげるから、下半身の前と後ろで気持ち良くなってね？」

アナルを犯す肉棒がずろろろ、と音を立てて肉筒の中を蹂躙し、女陰に陣取る肉棒は、ぴったりと隙間なく内壁にフィットして、緩慢な動きで上下に擦りながら、激しい振動を与えてくる。
ヴーンという、セミの鳴き声のような音がけたたましく響き、その振動がどれだけ強烈なものなのかを思わせる。

「あぁぁあ――――――――――！あっ！あっ！あぁぁあっ！」

肉壺の快感と肥大クリの快感が伴い、二重三重もの快感が２Ｂの身体へ一気に降りかかる。すでにショートしてもおかしくないほどの快感量だが、２Ｂの性感神経は丈夫に変えられている。

アンドロイドたちは、まるでその回路を壊そうとするように、２Ｂを責め立てている。しかし、２Ｂが簡単に壊れないことをアンドロイドたちは知っているかのようだ。どれだけ責めれば壊れるか、どれだけの責めで壊れずギリギリの超絶快感でいられるか。
恐らく、このような遊戯を繰り返し、何体もやってきたアンドロイドを弄んでいるのだろう。２Ｂもその餌食になってしまったのだ。

「うあぁぁぁあああっ！あがぁぁっ！はぐっ、ひぎいいいいいいいいいっ！」
射精できないのに肥大クリには極上の快感が注ぎ込まれ続ける。果てしなく気持ちいいのに、いつまでたってもゴールにたどり着けないのは、甘い拷問でもあった。

「あぐっ・・・あぐっ・・・！」
カラ打ちを続ける２Ｂの腰遣いを見ながら笑い、アンドロイドたちは動き始めた。

「もっと２Ｂちゃんを気持ち良くしてあげるね」

「中で何回もイカせてあげる・・・」

女陰とアナルを犯していた肉棒が、再び激しい抜き挿しを始め、２Ｂの体内へ激悦の摩擦を与えにくる。

「あごおっ！おおっ！んほおおおおっ！おおっ！んおおおおおおおお！」

獣じみた叫びが２Ｂの細い喉から放たれ、周囲のクスクス笑いは数を増してゆく。このような仕打ちを受けて、嘲笑され、普段の２Ｂなら相手を八つ裂き、血祭りにあげるところだが、今は快感の事しか、強いては射精絶頂することしか考えられなかった。

「ひいっ！ひっ！ひいいいいっ！」

歯を食いしばって女陰で近づく絶頂快感に耐える。絶頂してしまったら、女陰は激しく肉棒を締め付けるだろう。この振動する肉棒を。そのときはどれだけの快感が押し寄せてくるか、想像しただけでも恐ろしい。しかし、ここで２Ｂに甘い被虐の意識が動いた。

（流されたい、どこまでも快感を貪りたい・・・）

快楽で理性を動かせない２Ｂの無意識が、快楽に堕ちようとしていた。これまで過剰な責めを受け続けて、ここまで持ったのが奇跡と言えたかもしれない。

しかし、最後まで抗って共に無意識に働いていた理性が散り際に絶叫を放った。

「ひあああああっ！貴様ら、絶対に、あぁぁぁぁあああ！ゆる、さ、な、いっ・・・・！おあああああああ！」

その言葉が激しく辺りに響き渡ると、直後、アンドロイドたちの爆笑が炸裂した。

「あはは っ！２Ｂちゃん、まだそんなことを言える気力があるの？凄いね！ここに来た子で、そこまで持った子なんていないよ！」

「ほんと２Ｂちゃんは面白いなあ！」

「まだまだ虐め甲斐がありそうだね・・・」

しかし、２Ｂの残された理性はそこで引きちぎれた。もう、快楽に意識が飲み込まれていってしまう。

「あぁぁあああああああああ！イク、イク、イクウウウウ！」

無意識に我慢していた女陰の絶頂がこみ上げ、２Ｂはとうとう快感を極めてしまった。

ダイナマイトで岩を爆発したかのような激しい発破快楽が弾け、身体の指先、髪の先にまでビリビリと絶頂快感が走る。

「あああああああああああああ！イッてる！おあああああああ！」

そして同時に訪れる、極上の肉壺の味。２Ｂの女陰は最上の具合に調整されていて、奥はザラザラで先端をくすぐり、周囲は柔らかい触手のような襞がうねうねと想像できない動きでうねり、アンドロイドの肉棒を締め付ける。

その快感たるや、体中がバラバラになりそうなほどの激衝撃だった。

「あぁぁぁぁああ――――――――――――――――――――――――！」

２Ｂが空前絶後の女陰絶頂を迎えている最中、肥大クリにもその快感が伝わってきている。

「あぐう、ひいいいいいいいい！」
もう、顔からはあらゆる液体が流れている。涙も鼻水も涎も、止まらない。
性感神経がキシキシと引きちぎれそうな音がするかのようだ。しかし、これだけの容量の快感を受けても、２Ｂは射精絶頂ができないでいた。
肉棒の振動と女陰の極上の締め付けを受けながら、それでも達することができない。
まさに生殺し。２Ｂは口から泡を噴きながら射精絶頂を激しく訴えていた。

「イキたい、イキたい、射精したい！出したい、出したいよおお！出させて、お願い、おねが・・・んあああああああああああああ！」

次はアナルの絶頂が迫って来る。四つのカリ首を持つ肉棒の激感はすさまじく、通常なら痛みにすり替わっても不思議ではない荒っぽい責めだが、２Ｂには快楽のごちそうだ。

続きは製品版でお楽しみください。